2024年1月28日　労働者協同組合周知フォーラム～東日本ブロック～

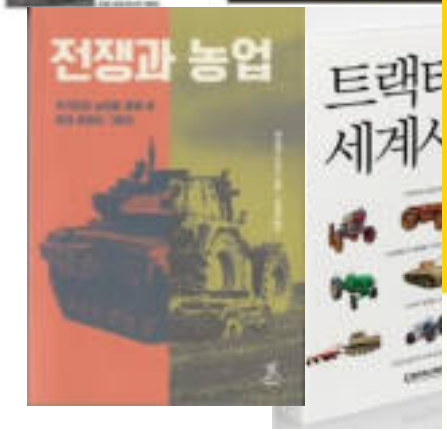
労働と自治
「はたらく」から「はたらき」へ

藤原 辰史（京都大学人文科学研究所）

自己紹介

関心のあるテーマ

- 二つの世界大戦
- 食の現代史
- 農業の技術史
- エコロジーの哲学
- 食と農の哲学



本日の内容

1. 労働とは何か

2. 労働が破壊された歴史

3. 労働と自治の統合に向けて

労働者協同組合法　第一条　目的

この法律は、各人が生活との調和を保ちつつその意欲及び能力に応じて就労する機会が必ずしも十分に確保されていない現状等を踏まえ、組合員が出資し、それぞれの意見を反映して組合の事業が行われ、及び組合員自らが事業に従事することを基本原理とする組織に関し、設立、管理その他必要な事項を定めること等により、多様な就労の機会を創出することを促進するとともに、当該組織を通じて地域における多様な需要に応じた事業が行われることを促進し、もって持続可能で活力ある地域社会の実現に資することを目的とする。

→そのためには、生活から独立し過ぎた、そして、商品化しすぎた「労働」概念をくつがえす必要がある。誇りのある仕事。

1　労働とは何か

労働は自由にする、
とはどういう意味か？

ヒント：
Stadtluft macht frei.

撮影：藤原辰史

アウシュヴィッツ強制収容所博物館で藤原撮影

アウシュヴィッツ
強制収容所での
選別の様子

「清潔」な収容所

- 「清潔は健康のもと」
- 「一匹の虱が死を招く」
- 「便所のあと、食事の前には、手を洗え、忘れるな」

レーヴィ『これが人間か』

撮影：藤原辰史

Wikipedia Commons

Primo Levi
1919-1987。トリノ生まれの化学者。アウシュヴィッツの生存者。1987年に自殺。

「我々はもちろん石けんがなく、水が汚れていても、顔を洗い、上着でぬぐわねばならない。また規則に従うためではなく、人間固有の特質と尊厳を守るために、靴に墨を塗らなければならない。」

→シュタインラウフの反論

（プリモ・レーヴィ『これが人間か』）

「オデュッセウスは歌声を聴く。だが、彼は力なくマストに縛りつけられたままだ。誘惑が強まれば強まるほど、彼はいっそう固く縛られる。［…］縛られているものは、いわばコンサート会場にいる。聴衆のように身じろぎもせず、じっと耳を澄まして。そして解放を求める彼の高ぶった叫びも、拍手喝さいの響きと同様に、たちまちに虚ろに消え去っていく。こうして先史時代との別離に際して、芸術の享受と肉体労働（Handarbeit）とは別々の道を歩むのである」。

アドルノ＋ホルクハイマー『啓蒙の弁証法』より

その後、アドルノは何を書いたか？

・実は、この論文は近代の労働の問題を扱っている。

■オデュッセウス＝自然と直接触れないで、働けと命令する地主や資本家

■こぎ手＝耳栓をして、唄なき労働をひたすら行う労働者たち

轟音を伴う機械労働は何を奪ったのか？

労作唄の特徴

- １．共同作業をリズミカルに（田植唄、稲こき唄）
- ２．肉体的苦痛を忘れる
- ３．密かに愛を告白する
- ４．地主が、小作の労働のテンポをあげる「メトロノーム」

ｃｆ：服部龍太郎『定本日本民謡集』現代教養文庫。
　　宮内仁『日本の仕事唄Ⅰ、Ⅱ』近代文芸社。

例）滋賀県東浅井郡湖北町の田植え唄

花嫁の一の大事は
深川渡り
つまげねば　裾が濡れます
つまげねば　白い股出る　ここ大事

＊「花嫁の」までに八株植えなくてはいけない。手も歌もうまい人だけが唄う。田植えは男女ともやったが、歌は男性だけ。

本来、「はたらくこと」には、さまざまな行為が重なっていた。話す、ケアする、情報を得る、遊ぶ、楽しむ、歌う、踊る。これが純粋化されたのは、わずか120年前のテイラー主義以降。

２　労働が破壊された歴史

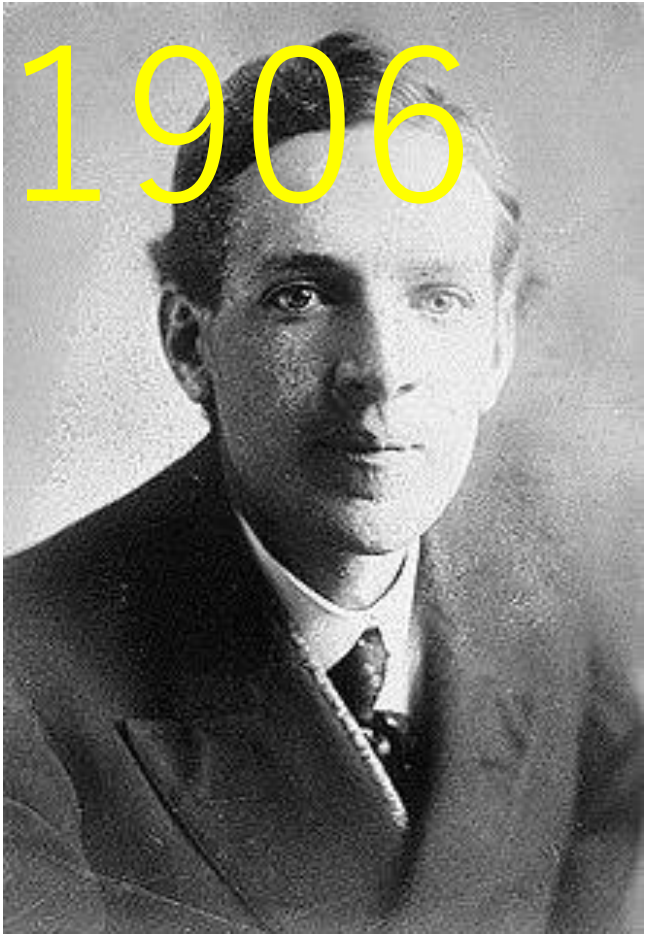
私たちの「労働」を作った神

フレデリック・テイラー（1856-1915）
『科学的管理法の原理』　（1911年）

テイラー主義とフォーディズム
・おしゃべり
・ストップウォッチ
・労働の効率化の罠

チャップリン『モダンタイムズ』
1936年

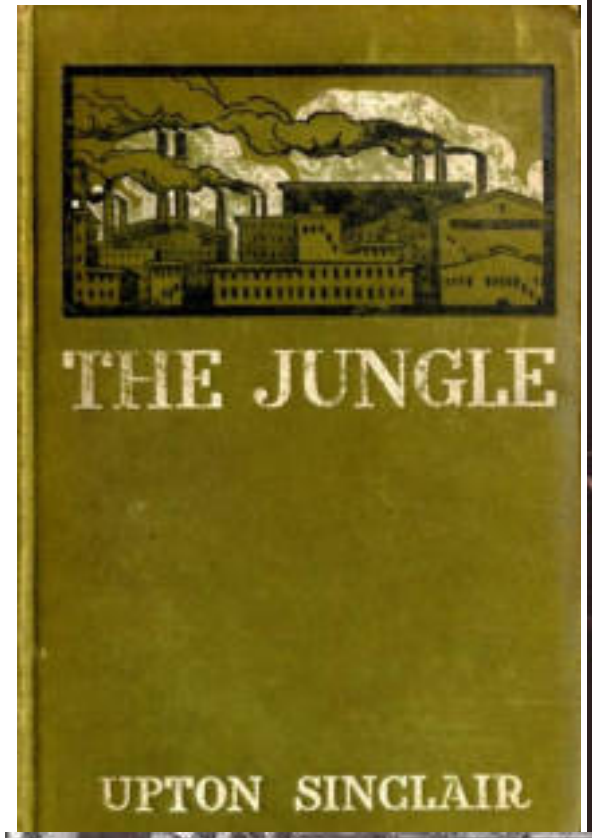
いずれもWikipedia Commons

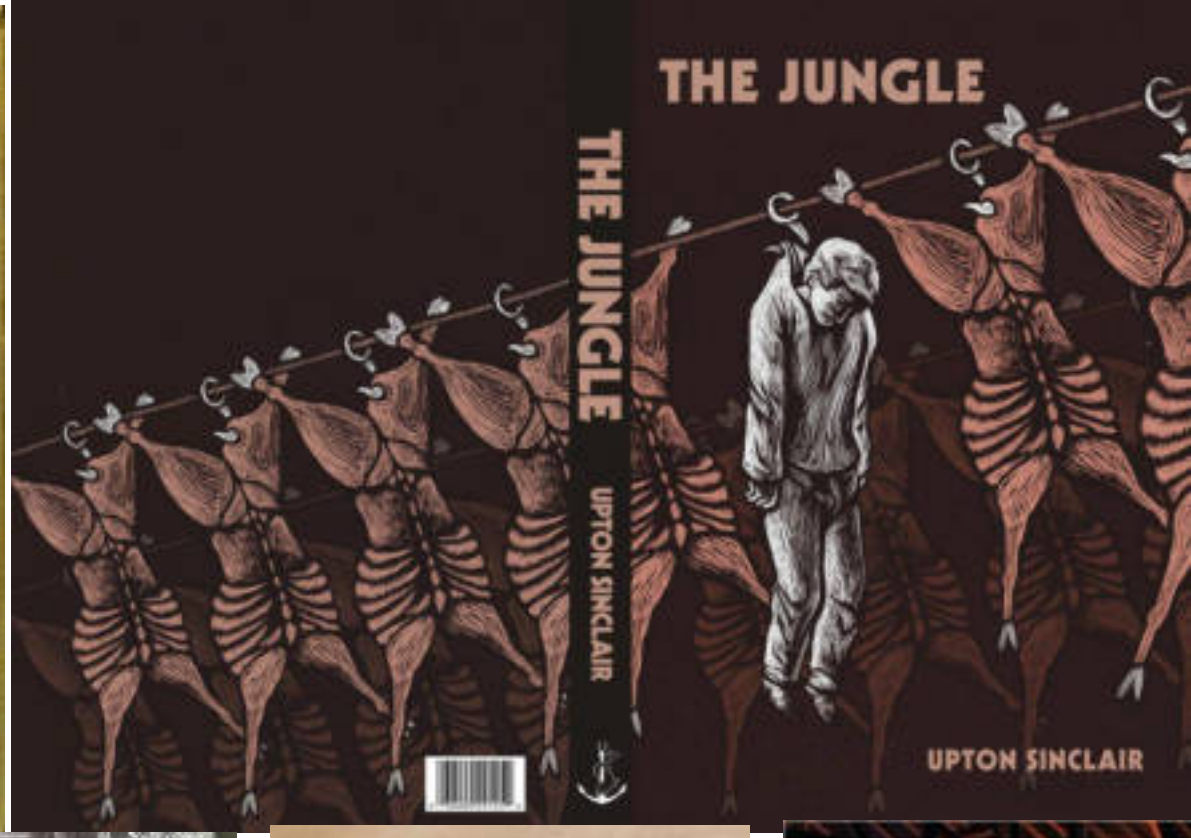


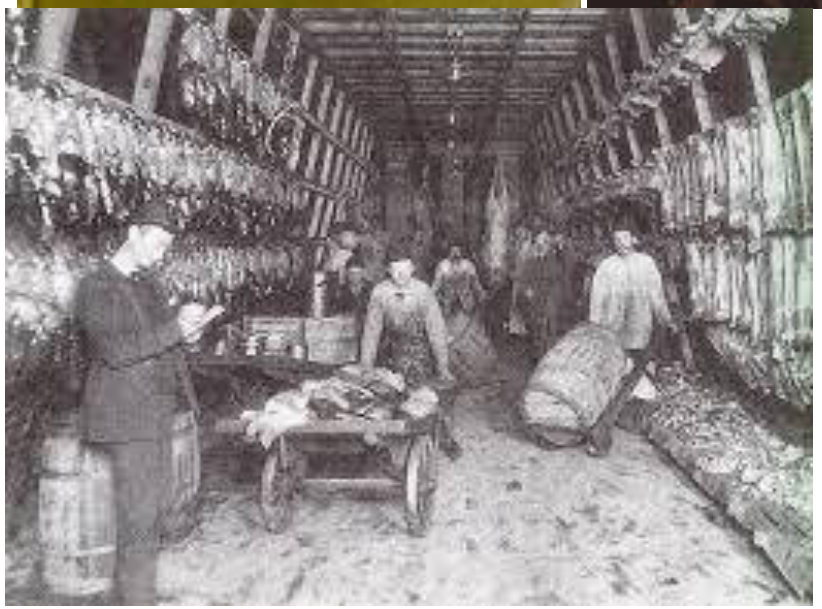
Wikipedia Commons

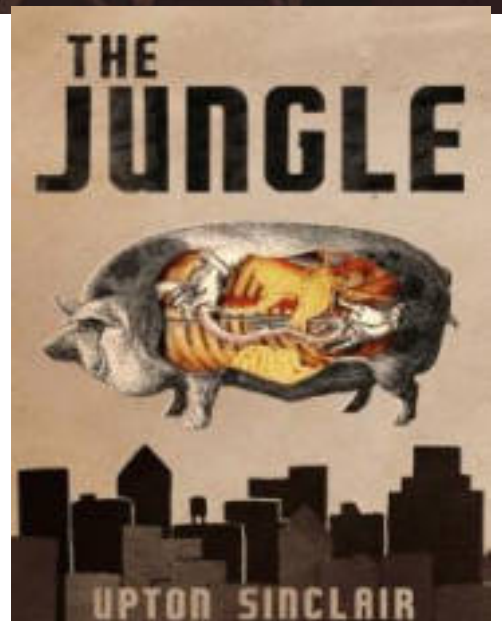
アプトン・シンクレア
(小説家、1878-1968)
小説家が暴く、
シカゴの食肉工場の汚染
と移民労働者の使い捨て
について

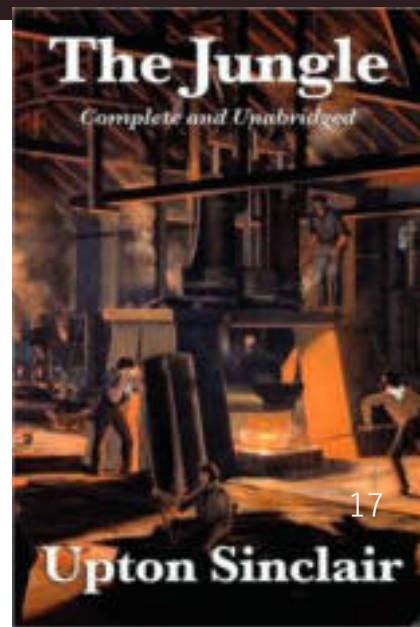
cf: コロナ時代の食肉工場











エリック・シュローサー
(ジャーナリスト、1959-)
『核は暴走する』もヒット。「シンクレアの再来」。

ジャーナリストが暴く移民労働者の過酷な労働実態
ファストフードの歴史

ラウルはメキシコのザポテカ出身で、カリフォルニア州アナハイムで建設業者として働いた後、コロラドにやってきた。英語は話せない。スペイン語専門のラジオ局でモンフォード社のコマーシャルを聞いて、グリーリー工場の求人に応募した。ある日、加工機のなかに手を突っ込んで、詰まった肉片を取り除こうとしていたとき、間違って機械が作動しはじめ、ラウルは片腕をはさまれて、二〇分後にようやく同僚に助け出された。機械を分解しなければならなかったからだ。救急車で病院に運ばれて、ざっくり開いた肩の傷を縫い合わされた。腱が切れていた。傷口を縫合され、強力な痛み止めを処方されたあと、食肉工場で送り返され、生産ラインに戻される。包帯でぐるぐる巻きになった格好で、ふらつきながら、痛みをこらえ、片腕を吊ったまま、ラウルは終業時間まで、段ボールから血をぬぐう作業をもう一方の手で続けた

（エリック・シュローサー『ファストフードが世界を食いつくす』楡井浩一訳、草思社、二〇〇一年、二五九－二六〇頁）。

参考）ブラック・ライヴズ・マター運動の背景（黒人差別の現在）
パトリース・カーン＝カラーズ＋アーシャ・バンデリ
『ブラック・ライヴズ・マター回想録』（青土社）

3 労働と自治の統合に向けて

「はたらく」ではなく「はたらき」へ

1. 障がい者しか表現できない美を追求してきた「態変」の金満里さんとの対話。「労働」概念が、障がい者の価値を貶めてきた。「はたらく」まえに「いる」という価値を。

2. 拙著「分解の哲学」の流れ。各人の自然に対する「はたらき」がおろそかにされたうえで「はたらく」に特化したことが、自然破壊と労働破壊をもたらした。

3. 農業＝作物をつくるまえに、土地の分解機能を高めるはたらき。

4. ケア労働＝人々の「いる」価値を高めるはたらき。

→労働の純粋化に抗する

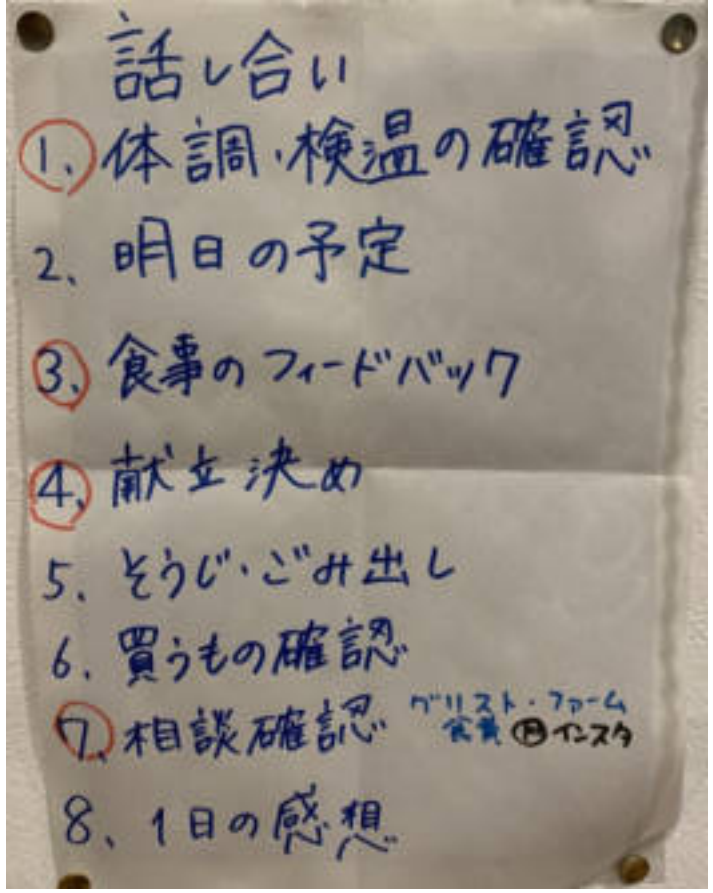
Three sisters agriculture

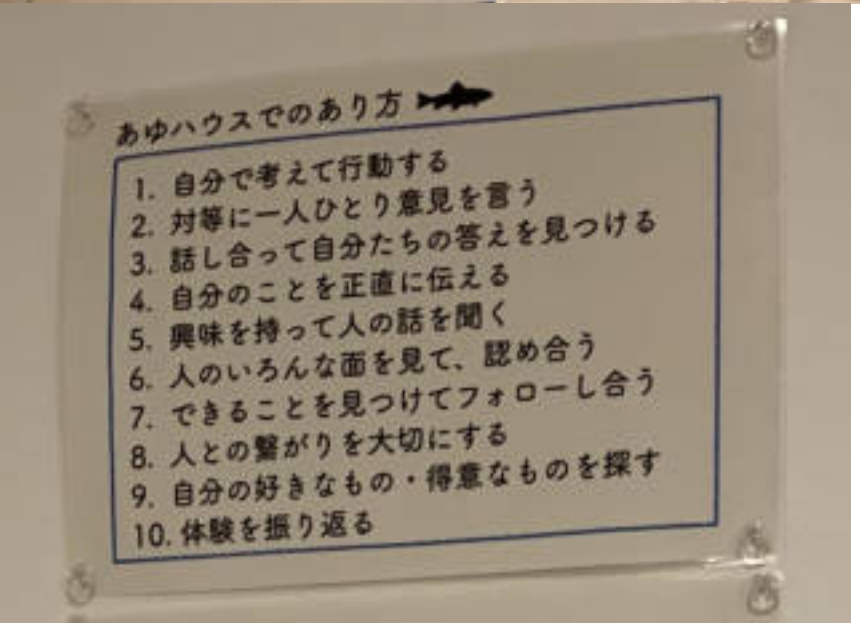
トウモロコシ（つるまめの支柱になる）

ツルマメ（根粒菌が空中窒素固定でアンモニア肥料を生産）

カボチャ（土壌を葉で被覆し、雑草の繁茂と土壌の乾燥を防ぐ）

近代農業が拒否したネイティブアメリカンの農業





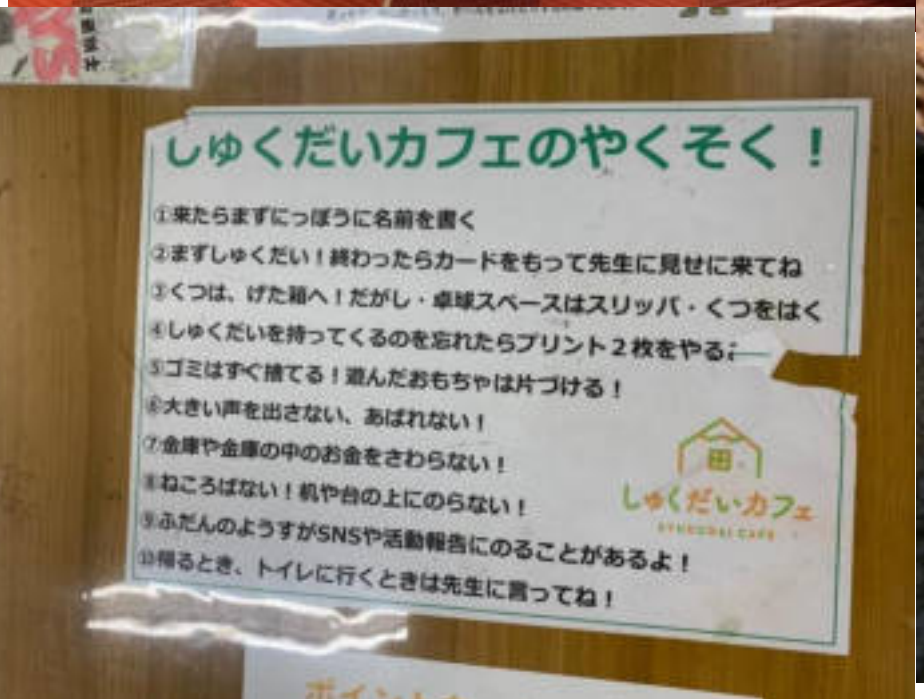
徳島県神山町城西高等学校の自治寮「あゆハウス」

藤原辰史撮影

今日のお肉料理
今日のお肉料理
鶏照り
今日の魚料理

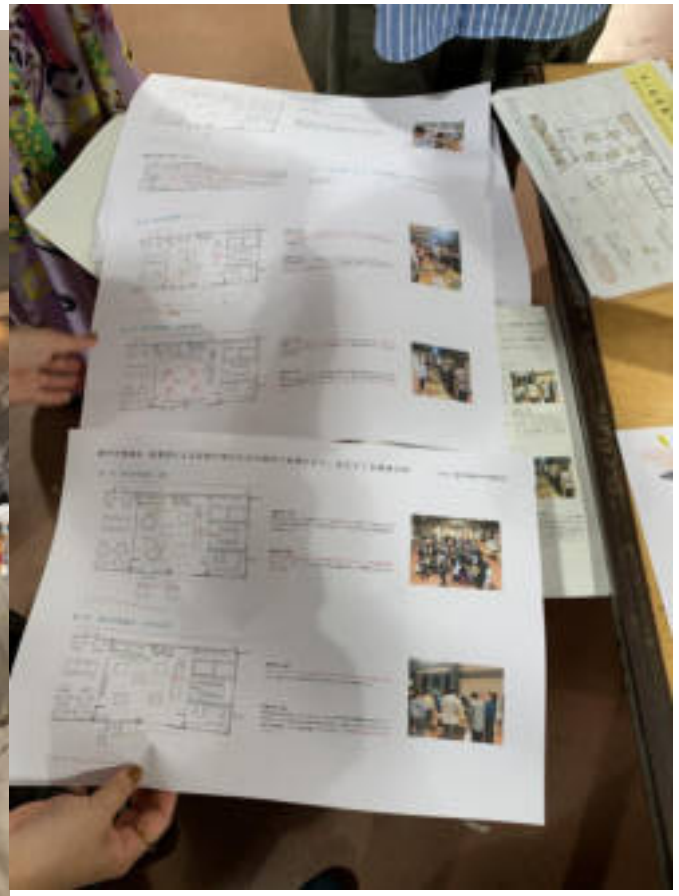
ばんざい東あわじ
1グラム1円のおばんざい食堂
ばんばんざい
地域でばんばん食材分けあい
Community Fridge
親切な冷蔵庫

FREE FOOD
FREEBAKERY
FOR
EVERYONE


しゅくだいカフェのやくそく！
①来たらまずにっぽうに名前を書く
②まずしゅくだい！終わったらカードをもって先生に見せに来てね
③くつは、げた箱へ！だがし・卓球スペースはスリッパ・くつをはく
④しゅくだいを持ってくるのを忘れたらプリント２枚をやる！
⑤ゴミはすぐ捨てる！遊んだおもちゃは片づける！
⑥大きい声を出さない、あばれない！
⑦金庫や金庫の中のお金をさわらない！
⑧ねころばない！机や台の上にのらない！
⑨ふだんのようすがSNSや活動報告にのることがあるよ！
⑩帰るとき、トイレに行くときは先生に言ってね！
しゅくだいカフェ

撮影：藤原辰史

横浜国立大学大学院（都市イノベーション学府）の共有スペース（パワープラント・ホール）を、
建築デザインコース（Y-GSA）の学生が主体的に取り組み（一応授業の一プロジェクトとして登録）、
「キッチンプロジェクト」が生まれた。



建築系だけに、配置にこだわる

私の講義と『縁食論』をきっかけに院生たちが作り上げた。

これまでの調査・聞き取りから

- フードバンク仙台＝フードバンクが農業をして、加工食品からの脱却を図る＝食の商品化から逃れた社会を目指す

- 盛岡の「なないろのとびら診療所 」に隣接した無料食堂＝病は医療だけで治せない。「患者様」「寄り添う」という言葉は使わない。

- 鳥取の徳永進さんの「野の花診療所」。ホスピスらしからぬ雰囲気を作る「食堂」と図書館。「豊かな終わり」

おわりに

Alfred Sohn-Rethel, Das Ideal des Kaputten: Über neapolitanische Technik, in: *Frankfurter Zeitung*, 21. März 1926.

ナポリ人は、卓越した名人芸で、自分の所有する壊れた自動車を、街頭で見つけたような小さな木の棒という予想外のものを取り付けて、ふたたび走らせることができる。だがもちろん、当然のことながら、まもなくそれはふたたび壊れるだけだ。というのも、完全に修理してしまうことは、ナポリ人に嫌悪感をもたらすから。ナポリ人はむしろ完璧な自動車などハナからあきらめているのである。→「ナポリ人」のいい加減さになんとなく、心が解放される。

松嶋健『プシコ・ナウティカ――イタリア精神医療の人類学』（世界思想社、2014）

- 身体障害者、薬物依存からの回復プログラムをやっている青年、精神保健サービスの利用者、元受刑者などを受け入れるイタリアのワイン農場（除草剤、殺虫剤、化学肥料を使わない）。場長のジェンティリーニ氏の言葉。

「社会は多様な人間、多様な存在からなっているからこそ、一緒に何かをすることができる」「自然だって同じことだ。やれ雑草だ、やれ害虫だ、と言っては排除するのは人間の一方的な都合であって、どんな草も、虫も、微生物も自分たちの生を全うしているだけだ」（p.261）

→イタリアは「不便で面倒くさい国」「何をするにもやたらと時間がかかる」
ある意味では「意図的」→「テクノロジーをわざとうまく機能させないようにしている」
やりとりや、ものとの一体感を重視する態度(p.416)

時代とともに消える概念と、これから残すべき概念

1. 「スマートな社会」ではなく、「弱目的」な社会

2. 「労働の効率化」ではなく、「はたらき」の重ね塗り